



interview 語学 + 音楽 + 旅 = 英語科教諭 平能 修

ドイツ語専攻から英語教師へ



——平能先生は、英語科の先生としていま勤めていらっしゃるんですけど、もともとはドイツ語を専攻してらしたじゃないですか。ドイツ語をしながら、英語の先生になりたいという考えだったのですか。

どちらかという、教員になりたいという思いが先で、教科はなんでもよかったです。進学した大学だと取れる免許が英語か専攻語(僕の場合はドイツ語)で、両方は取れなかったんで、英語の教員免許を取得しました。その後紆余曲折あって、社会科の教員免許と小学校の免許も取得しました。

——もともと先生になりたかったのですね。

そうですね…。でも、当初は両親にも反対されていて、自分でも適性があるか自信がありませんでした。ですから、あえて教員養成系の大学には進まず、教職課程の単位に苦労しながら、本当にやりたい仕事なのか見極めながらここまでできました。

——ちなみにドイツ語の高校教員って、需要はあるのですか？

いくつかの高校では外国語の授業としてドイツ語やフランス語が開講されているところがあるそうです。実際、英語以外の免許の教育実習をする場合はそういったところで行わせていただいているようですよ。

——今ドイツ語教えるといわれたら？

絶対に無理です！(笑) お恥ずかしい話ですが、専攻語だったドイツ語が本当に苦手で、実は一度留年をしてしまっています。2年生から3年生に上がる時の試験が50点だったんです。60点で単位認定だったので、「10点くらいはおまけしてくれるかな…」と思った自分が甘かったです。当時からの「ドイツ語コンプレックス」は今でもあって、どこかで学びなおしたいな、と思っています。

——英語とドイツ語って似ているのですか。

同じアルファベットを用いるのですが、結構違うと思います。単語レベルでは同じ音になることも多いのですが、スペルが異なる場合が多くて、それに苦労しました。教職で英語の授業があったりすると、英語の授業なのにドイツ語の綴りをかいてしまったり…。英語で photo と書くべきところを、Foto(ドイツ語で「写真」の意)と思い切り書いて×をもらったことを今でも覚えています。



僕は今、大学の市民講座でフィンランド語を学んでいるのですが、フィンランド語は文法もスペルも発音も英語と完全に違うので、お互い干渉せず、かえって学びやすいように感じています。ただ、フィンランド語自体がえげつない数の格変化が起こるので遅々として上達しませんが…(苦笑)



語学へのまなざし

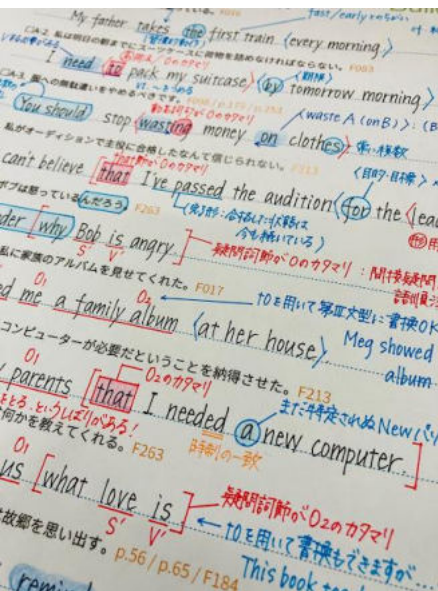
——しかし、語学ができる人はうらやましいですね。

どうなんでしょうね。そもそも僕は自分のことを「語学ができる」とは全く思っていないので…。単語や表現を暗記したりするのも元々とても苦手です。今でも辞書や参考書を調べては忘れる、の繰り返しです。

——たとえば中学生など初学者に、なにかコツなどあったりしますか。

うーん…先ほども言ったように、僕は「覚えること」が苦手ですし、テクニックや効率からかけ離れた言語学習を積んできているので、これ！と自信を持って言えることはないのですけれど…。ただ、やっぱり「ことば」なので、前向きな思いがないと、アウトプットのモチベーションにつながらないので、なかなか上達しなかつたりしますね。語学系の大学に女子が多いのは、女の子の方が「おしゃべり」に強いからなのかもしれません。

また、こと英語に関しては、親御さんの世代で、「英語ができればよかったなあ」という思いが強すぎることで、お子さんの英語学習に過敏になっているケースがあるように思います。言語は本来、委縮することなく大らかな環境で学ぶことで表現の拡がりを見せると思うのですが、英語学習の開始がどんどん前倒しになっていくことで、保護者の皆さんも、そして生徒自身も焦りと苦手意識ばかりが募った状態で中学校入学を迎え、高校入学の頃にはそれがかなり頑固なこびりつきになってしまっているように思います。



今年の僕の授業では、英作文を積極的に採り入れています。答えが1つに定まりにくく、さまざまな知識を総動員して書かなければならないので、自分には無理だ、と決めつけて苦手意識を持っている生徒が多いです。また僕としても、画一的な指導がしにくく、また個人の添削をしてフィードバックをするのに膨大な手間がかかります。それでも粘り強く繰り返していくと、少しずつ精度が上がっていきます。生徒たちも自力で書いた英文がA評価をもらえるのが本当に嬉しいようで、今ではむしろ楽しそうに取り組んでくれています。



音楽とともに

——平能先生は奉職して何年たちましたっけ。

えーと……（指折り数える）7年目、ですね。

——気づけば、早いですね。

都内の高校で非常勤講師を2年、地元長野県の村立中学校で4年。今まで渡り歩いた学校の中で、一番長くなりましたかね。

——だから、吹奏楽部の顧問としても7年目になりますか。

ああ、1年目は顧問がなかったので、6年ですね。初年度、若手の先生に誘っていただいた忘年会で岡田先生（※吹奏楽顧問：詳しくは Weiss 2020 年 2 月号参照）とお話をして、そこで楽器の話になったのでした。

——じゃあ、忘年会で音楽をやっているということが発覚したということですね。

そうなんです。前任校でも吹奏楽部の副顧問をやっていたのもそこで判明して。その後使われていなかった学校楽器のアルトサクスを始めて、2か月後の「三年生を送る会」がデビューでした。緊張しすぎて何も吹けなかった記憶があります。

——じゃあ、サクス歴も7年ですね。

うっ、そんなに！ 中学から始めた子が大学生になるまで続けたことになりますよね。もっとちゃんと吹いていればそこそこのキャリアになるはずなのですが…。

——本業(?)ヴィオラ歴は何年ですか。

高校1年以来なので20年になります。こちらもいつまで経っても準初心者から抜け出せずにいます。ただ最近は歳を重ねたことで、少し「歌心」が分かってきた気もしていて、表現の幅が広がってきた手ごたえも感じています。

——コロナで、所属している Aprico Symphony Orchestra の活動はどうなっているのですか。



本当は来月定期演奏会だったのですけれども延期になってしまいました。団内で多重録音で合奏をする企画があって、それにチャレンジはしましたが、他に目立った活動はなく、現状練習再開の目途は立っていません。個人的には、11月に地元の小さなホールでソロのプログラムを弾かせていただくことになっているのです。



が、それが何とか開催できることを祈りながら個人練習をしています。

——音楽をやるものとしては、音楽系は非常に肩身が狭いですね。

芸術の分野って、なかなか復帰しづらい情勢ですよ。劇場なんかでもまだなかなか難しいようですし…僕たちアマチュアの間はまだしも、プロの皆さんを思うと、心が痛みます。

——見てもらってなんぼ、というところがありますからね。

——私の団も、昔の演奏に、吹き真似をした映像を撮って、あてた映像をつくりました。これはこれで今しか作れないような気がして。

「演奏」ってそれ自体は消えてしまうものだから、残す努力をしないと、あつというまになくなっちゃいますよね。早く思い切り合奏できる世界に戻ることを祈るばかりです。

旅のこと

——旅行によく行かれているようですが、旅費の捻出とかどうされているんですか…？

時期は当然限られるので、行ける日数のなかで航空券の検索をします。やはり航空券はいいお値段なので、年末年始やGWなどの休暇中テンションが上がっているときに、勢いで予約サイトをクリックすることが常です。あとは滞在先ではなるべく徒歩移動、食事は自炊にチャレンジするなどして節約しながら楽しむことにしています。

——なるほど、それに向けて貯金をするというよりは、物理的な条件に合わせて行先を選択している感じなのですね。

——平能先生の中のベストってどこですか。

一番良かった国はどこ、と聞かれることは多いです。今まで30か国以上訪れているんですが、一番と聞かれたらトルコと答えるようにしています。トルコは言わずと知れたイスラム圏で、宗教学に明るくない僕はイスラムについて全くわかっていなかったのですが、街中でコーランが流れるというのは新鮮な経験でした。ヨーロッパとアジアとアフリカが出逢い、ローマ帝国時代から脈々と受け継がれたイスタンブールの街は、何時間見ても飽きない光景でした。



あと、繰り返し訪れたいと思っているのは北欧です。中でもフィンランドのことは映画

「かもめ食堂」で興味を持ち、学生時代に一度、社会人になってから二度訪れました。北欧独特の洗練された街並み、日本人によく似たシャイで真面目な人柄、長年大切にしたいくなるような雑貨、そしてムーミン！いつかフィンランド語で読めるようになりたいです。日本から



直行便で9時間台で行けることも魅力ですよ。

——いいなあ、いつてみたいなあ…

まあ独身なので身軽に行けるところはありますね。本当は宿泊などを考えると2人1組が一番いいとは思いますが。特に食事のときは、向こうは一皿が多かったりするので、シェアできたらいいな、とは思いますが。無言で食べるのもちょっと味気ないですし。それもあって旅先では地元のスーパーマーケットに行って食材を買い、簡単な自炊をすることが多いんです。

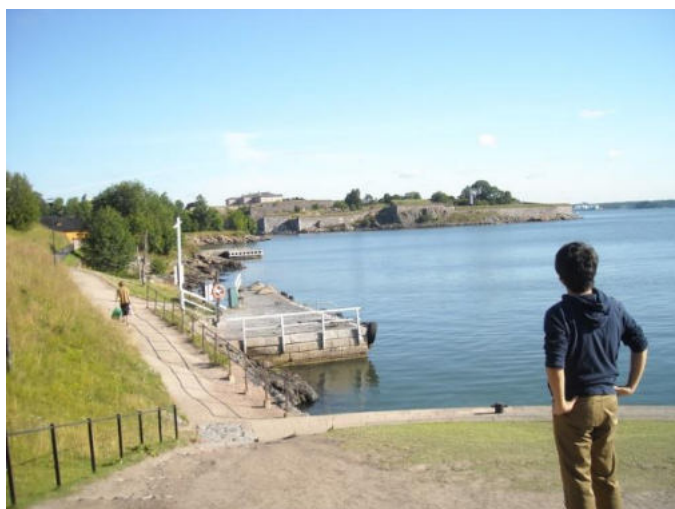
——現地の人は、そんなに大食漢なのですか。

いや、むしろ現地の人は、そんなに食べているイメージがないですね。日本ほど食事を一度でしっかり摂るという概念がないような気がします。夕方でも、テラス席でビール1杯で何時間でも、という光景を目にします。

——確かに私もオーストラリアにいったときに、食事がリンゴと飲み物だけ、というときがありました。あれが当たり前なのかもしれませんね。

——では最後に、平能先生にとって「旅」とは、何ですか。

「another sky」みたいですね(笑)。……(考えて)自分と向き合い、リセットする時間だな、と感じます。旅行中は、ペラペラしゃべることは全くなく、黙っている時間が多いです。移動の際も、タクシーなど必ずしも安全とは限らないので、いきおい歩く場面が多くなってきます。そこでいろいろと考えごとをするのですよね。歩きスマホは外国ではひったくりの危険があるので、ご法度です。延々と歩きながら、考え事をしています。そこで日本に残してきた「ごちゃごちゃ」をひとつずつ反芻しては整理し、次の身の振り方を決めていきます。僕は些細な事で煮詰まってしまう性分なので、海外旅行が無理でも、国内でサッと旅に出てそういう「リセット」をするようにしています。そういう意味では、僕にとって旅は、自分を整える、他には代えがたい場だと思っています。





voice 知らないことを、知りたい

今回は部活動と学習とを両立して頑張っている、3年4組の石橋君にインタビューをしました。

高校から挑戦したバレーボール

——今日はよろしくお願いします。まずは、簡単に自己紹介を。

3年4組の石橋依穩（いしばし・いおん）です。部活はバレーボール部で、委員会は体育委員をやっています。

——趣味はありますか。

映画を観ることです。体を動かすのも好きです。

——最近観た映画というと、何ですかね。



最近はコロナによる自粛の影響で、新しい映画は見ることができていないのです。そのためアマゾンプライムで、『ワイルド・スピード』
(注1)などを観ました。

(注1) 「ワイルド・スピード」 ストリート・レーシングをテーマとしたカーアクション映画のシリーズ

——シリーズものだね。スポーツは小さいころからやっているのですか。

小学生のときはクラブチームでサッカーをやっていました。また、水泳や空手も少しだけやっていました。

——なるほど。小さいころから活発な感じだったんですね。保善に入学する時点では、部活はどこに入ろうと考えていましたか。

中学校では陸上競技をやっていたので、高校でもやろうかとは少し考えました。けれど、高校では個人プレーよりも団体競技がやってみたいと考え、バレーボール部に入部しました。

——中学校で3年間打ち込んだからこそ、高校ではチームプレーにも挑戦してみたいという感じでしょうか。ちなみに、保善高校はサッカー一部も有名ですが、サッカーという選択肢は？

サッカーは小学校以来やっていなかったもので、ついていけないと思い、バレーボール部に入りました。当初、どこの部活に入部しようかは迷っていたのですが、クラスの友達がバレーボール部に入っていたので、バレーボール部に入部しました。

——バレーボール部に入ってみて、最初のころはどうでしたか。



最初は何も知らない初心者だったので、ボールを扱うのが難しかったです。そこで、最初は簡単な技術から練習していき、やがて慣れてきて、ちゃんとできるようになりました。

——本校のバレー部は、初心者でも大丈夫ということですね。コロナウイルスの影響がなかったならば、今（インタビューは7月に行なわれました）でも活動時期だったのですか。

本当は6月に試合があり、そこで負けたら引退だったのですが、今年は大会自体が中止になってしまいました。

——突然、引退になってしまったのですか。どう感じましたか。

試合に向けて頑張ってきて、これまでは結果があまり出せていなかったもので、結果を残したいと思っていたのですが、何もできずに終わってしまったのが、とても悔しく思います。

保善高校バレーボール部の魅力

——分かります。ところで、保善のバレーボール部の魅力って何ですかね。

バレーボール部は初心者も大歓迎です。未経験でも、基礎から教えてくれるのも魅力だし、保善の強化指定部^(注2)ではきつすぎると感じる人でも、バレーボール部も週5日活動なので、しっかり活動しているという充実感が得られます。

(注2) 強化指定部 保善高校では、ラグビー部・陸上競技部・バスケットボール部・サッカー部・空手道部の5クラブを「強化指定部」に指定し、全国大会への出場に向けて、様々な取り組みを行なっています。

——顧問は誰ですか。

顧問は2人いて、中林先生と貴家（さすが）先生です。

——指導は、どんな感じですか。

中林先生は、普段は優しく、一方で礼儀などの当たり前のことについてはしっかり指導して下さいます。貴家先生も同様です。

——私も一度、バレーボール部の練習を見学しに行ったことがあります。そのときに受けた印象は、みんな一生懸命だよね。声のかけ方とかも含めて。

そこは意識をしています。試合などでも雰囲気を作りますし、また初心者もいる一方で経験者もいるので、声出しによって雰囲気も含めて引っ張ってくれています。

——ところで、バレーボールには、サッカーのドリブルのような、テ



クニック的なものはあるのですか。

あります。テクニクという言い方が当たるかはわかりませんが、例えばスパイクなどの、ネットに近い球種などは、打つのも返すのも、技術を要すると思います。

——そういうことなのですね。あと、スパイクを受けている様子を見て思うのですが……、痛くないですか？

それは比較的多くの人から言われます。最初は確かに痛いですが、ただ、1年生の夏くらいになってくると、痛いことは痛いのですが、徐々に慣れてくるというか……（笑）。

——男子バレーボールの中継などでも、音がすさまじいですよね。見ているとすごいなあと感じます。

たしかに音はすごいのですが、プレイヤーからすると、むしろボールを上げることの方に集中している気がします。

検察官を志して



——ところで学習の話に転じますが、文系・理系はどちらですか。

文系です。

——今3年生ですが、志望校は決まっていますか。

明治学院大学の法学部に行きたいと考えています。

——その理由は。

将来、検察官になりたくて。保善に入学する時点では、将来の志望はあまり決まっていなかったのですが、とりあえず経済学部か法学部だろうとは考えていました。勉強を続けているうちに法律についてより知りたくなり、弁護士か検察官を志すようになりました。そして比較してみると、弁護士はどういう人に対しても弁護をすると思うのですが、検察官のほうが正義に向けて方向性がはっきりしているのではないかと考えました。

——小さいころから正義感が強かったのかな。

うーん、そうなのでしょう。（笑）

——法律に興味を持ったというのは。



今まで、法律について深くは知らずに過ごしてきたので、むしろ今知らないことについて学びたいと思いました。だから大学でも、法学を勉強したいと志すようになりました。

部活と勉強の両立

——それは、バレーボールを始めたときに通じるものがありますね。部活との両立について、練習日程が少なくない部活動と思いますが、両立はどうですかね。

大変なんですけど、全校で実施されている数学月例テストや国語力テストなどの小テストの積み重ねが、定期試験にもつながっていくので、日々のそういった小さい取り組みを大切に、勉強しています。

——授業も含めて、日々の学習が大事ということですね。それにしても、3年生ということで学校生活も残りわずかですね。実質あとは2学期を残すだけだと思いますが、どうやって過ごしていきたいですか。

コロナウイルスのために、バレーボールの大会もなくなってしまい、そのことも含めて悔しい思いもたくさんしたので、まずは進路を確定させ、そのあとで部活動にも少し出るなどしてから、卒業していきたいと思います。

——今の中学3年生も同様の状況だと思うのですが、何か学業上のアドバイスなどはありますか。

自分は中学の最後の方まで、あまり勉強してきませんでした。そのため高校に入ってから、むしろ焦って勉強をするようになったところがあります。だから、少々しんどくても、日々のテストや定期試験に向けては、こつこつ努力を重ねていくべきだと思います。

——保善高校を目指す生徒には、部活も勉強も両立させたいという生徒もいると思うのですが、何かアドバイスはありますか。

部活と勉強の両立は大変だと思うのです。部活のあとはどうしても疲れて、復習などもできずにすぐに寝てしまうということがあると思います。けれど、大学に進学するためには高校1年時の成績も問われます。だからこそ、なんとか負けずに努力を重ねてほしいと思います。

——現2年生・1年生に対してはどうですか。

1年生は入学したばかりで、この学校に慣れていくことが大事だと思います。2年生だと、来年にはもう3年生、すなわち大事な時期がやってくるので、まだまだ時間があると遊びすぎないで、1日1日を大事にしてほしいと思います。時間が過ぎ去るのは、本当に一瞬なので。

——振り返ってみると一瞬だったということですね。保善高校での印



象的な行事などがありますか。

文化祭は印象に残っています。中学校では文化祭ではなく合唱コンクールだったので、高校での文化祭で模擬店などを出して他の学校の人に来るとするのは印象的でした。ちなみに在籍したクラスでは1年次では巨大迷路をやり、2年次には縁日の屋台で、綿あめや飲み物、射的などをやりました。

——ここまで、主に部活動と学業面についてたずねてきました。他に何か、言っておきたいことはありますか。

保善高校は男子校なのですが、最初は男子校ってどうなのよ？と思う人もいるかも知れません。でも女子がいないならいいで、むしろ逆に男子だけだからこそ、色々なことをしたり、話したりができる面もあります。運動部なども、男子だけでやるからならではの楽しさがあるように思います。

——体育祭なども、遠慮なく思い切りぶつかれますものね。

あと、部活動には入っておいたほうがいいです。部活に入ること、またクラスとは別に友達ができたり、試合に勝ったり負けたりといった思い出ができるので。もちろん文化部でもいいと思うのですが、部活動には絶対に入っておいたほうがいいと思います。



column 〈無限〉の世界

細谷 大輔

先日、本校生徒のT君（2年生）が私を訪ねてきて「 $1=0.999\cdots$ であることが納得できません」と言いました。

T君の話が続ける前に、まずそもそも、等式 $1=0.999\cdots$ （以下9が無限に続く）は正しい等式です。このことは比較的簡単に確認することができます。実際ひとつ簡単な「証明」をお見せしましょう。

$1\div 3=0.333\cdots$ であることは、筆算をすれば確認できます。また、 $1\div 3=1/3$ ですから、 $1/3=0.333\cdots$ が成り立ちます。この等式の両辺を3倍すれば $1=0.999\cdots$ です。（証明終）

私はT君にこれも含め、いくつかの「証明」を見せました。それらを彼は理解してくれました。しかし、それでも彼は「納得がいかない」というのです。要するに「腑に落ちない」のです。これは大変困りました。なぜならこの等式の正しさが「腑に落ちる」ためには、少しでも高度で抽象的な数学を理解していなければならないからです。T君に「実数体とは有理数体のCauchy列による完備化なのだから当たり前でしょ」とは言えません。困りました。

この等式を納得するためには、そもそも $A=B$ とはどういうことが成り立っている状態なのかを改めて考え直す必要があります。「等式の意味」など考えたことない人がほとんどでしょうが、ここで再考察してみましょう。

$A=B$ とは

(イ) 「AとBの差が0」、

もしくは

(ロ) 「AとBの差をいくらでも0に近づけることができる」

の、どちらかが成立していることを表しているとしましょう。(イ)は $A-B=0$ ならば、当然 $A=B$ が成り立つので理解しやすいでしょうが、問題は(ロ)です。この意味については $1=0.999\cdots$ のT君への説明をここで再放送（若干の再構成あり）しますので、それを見て納得してもらいましょう。



私「1と1が等しいのは、両者の差が0だからです。1-1=0、ゆえに1=1ですね」

T「はい」

私「ところで1と0.9は等しくない。なぜなら両者の間には0.1の差があるから」

T「わかります」

私「1と0.99999も等しくない。なぜなら両者の間には0.00001の差があるからね」

T「それもわかります」

私「では1と0.999…の差を求めてください」

T「それは0.000…(以下無限に0が続く)です…、あ、なるほど」

どうでしょう。T君が最後に求めた差の0.000…は、はるか遠くの小数第何位かに、「1」がつくことはあるでしょうか。

ありません。なぜなら、もしどこかに「1」が現れてしまったら、それは0.999…の小数点以下「無限に」9が続くことに反してしまうからです。つまり1と0.999…との差はいくらでも0に近づいていくのです。

さて、この手の「数の不思議」はT君のように〈理解はできるが腑に落ちない〉という状況に陥ることが多いのですが、それは多くの場合〈無限〉を相手にしているからです。

例えばこの話は、「小数点以下〈無限に〉9が続く」という状況が〈腑に落ちない〉原因です。有限の存在である人間は、そもそも〈無限〉を見ることはできない。だから直感に反するので〈腑に落ちない〉のです。別の言い方をすれば、だからこそ数は〈理性〉でとらえる必要があるのです。

高校の数学では、中学とは違い〈無限〉に積極的に触れていきます。そこにはこれまでには見たこともない豊潤な世界が広がっています。ぜひ本校と一緒に数学の世界を散策しましょう！

